

歴史・風土に根ざした郷土の川懇談会

日本文学に見る河川

報告書

平成十五年五月

歴史・風土に根ざした郷土の川懇談会

# 目次

はじめに	1
一 背景 社会的な変化	3
二 日本の文学等に見る河川の姿	5
(一) 日本の文学等における河川の特徴	5
(二) 代表的な文学等に見る河川の姿	6
(イ) 和歌、俳句にみる川の姿	6
(ロ) 今様にみる川の姿	11
(ハ) 民俗にみる川の姿(「川の民」の記憶)	13
(ニ) 祭りや信仰にみる川の姿	15
(ホ) 絵画にみる川の姿	18
(ヘ) 映画にみる川の姿	21

(ト) 近代文学にみる川の姿 ..... 24

三 歴史・風土に根ざした川を目指して ..... 27

(一) 今求められていること ..... 27

(二) 歴史・風土に根ざした川づくりのための「よすが」 ..... 28

(三) 歴史・風土に根ざした川を目指して ..... 31

資料

和歌・俳句の全国分布 ..... 33

祭りの全国分布 ..... 34

和歌にみる最上川の変遷 ..... 35

歴史・風土に根ざした郷土の川懇談会 日本文学に見る河川 委員名簿 ..... 36

## はじめに

近代以降の効率的な治水を優先せざるを得なかった川づくりを経て、今、川が本来持っていた治水・利水、水質浄化、癒し、生態系保全等のいろいろな機能を充足するような本当の意味での川づくり、川の個性を生かした川づくりが求められている。そのような川づくりに当たっては、現時点でのもの見方だけではなく、川から見た長い歴史の流れの中の「今」をとらえることが重要である。その際、我々のよすがの一つとなるのは、古くからの和歌、俳句等の文学・芸術に見られる、その時代時代の切り口から捉えられた川の姿である。

このような中で、本懇談会では、川の姿、川と人との関わりを、文学などを中心とした芸術の中でたどり直してみようというのを眼目とし、時代毎に日本人が河川をいかに表現し、河川に対してどのようなイメージ・河川観を持っていたのかを議論してきた。

今後の河川の整備においては、川づくりに求められる治水・利水や環境保全の機能の確保はもちろん、伝統工法、舟運、祭りなどの保存、継承や多自然型の川づくり、水辺の景観整備な

どによって地域の特性にあった川の魅力を引き出し、個性ある地域づくりに寄与するような取り組みが求められる。このためには、河川管理者は川から見た流域全体の長い歴史・風土をひも解き、十分に理解する中で、川の魅力や川の本来持っていた様々な機能を再認識し、個性あ  
る河川整備に息長く取り組んでいく必要がある。

本報告を端緒の一つとして、河川行政が地域とともに歩み、各地域の歴史・風土に一層根ざしたものとなり、また、二十一世紀の川が人との関わりを回復し、ふるさとのシンボルとして  
ながく住民の心に残る原風景となることを期待するものである。

## 一 背景 社会的な変化

アジアモンスーン地域に位置する我が国では、多様な降雨形態や、急峻な山地、複雑な地形・地質などにより、多様性に富んだ河川が形成され、その中でさまざまな風土が育まれてきた。川は風土の重要な構成要素の一つであるとともに、豊かな自然、人々の交流の場であり、地域共有の公共財産であった。

一方、稲作を中心とする生活を営んできた我々日本人は、洪水と隣り合わせの土地（氾濫原）に生活の場所と糧を求め、川を管理し、利用する知恵を長い歴史の中で育んできた。また、川は古来より重要な交通路であり、水運を通じて河川の上下流はひとつの共同体として存在していた。同時に、川はコミュニティの境界でもあり、しばしば左右岸、上下流で対立の場ともなっていた。このような我が国における川との深い関わりを証として、万葉集以来、川が文学作品に頻繁に登場していること、清め、弔いなどの信仰の場として流し雛のような行事や祭りが各地で今日にいたるまで脈々と受け継がれてきていること等が挙げられる。

近年、国民のニーズやライフスタイルが多様化し、社会は成長から成熟へと急速に転換しつつある。ゆとりや安らぎ、自然との触れあいを求める社会の流れの中、地域の人たちは身近な歴史・風土に関心を持ち、川にまつわる歴史や風土に愛着を持ち始めている。例えば、舟運の復活を求める動き、水源地整備基金・水源税構想など、流域の連携に向けた活動が始まっている。また、川を活かしたまちづくり活動等、地域の特性を踏まえた個性的な地域づくりや川づくりの必要性が認識され、様々な取組が行われるようになってきている。

川の姿は地域の歴史、風土を反映したものでもある。地域の自然、歴史、風土等を大切にしつつ、共有の財産である川について、地域の人々自らが見つめなおし、川づくりに取り組んでいく必要性が高まってきている。

## 二 日本の文学等に見る河川の姿

### (一) 日本の文学等における河川の特徴

古代より稲作を行ってきた我々日本人は、河川と密接に結びついた生活を営んできており、このつながりは、文学や絵画、能や歌舞伎など様々な芸術に豊かにかつ多彩に表現されてきた。また、これら表現された芸術は、地元だけでなく、広く全国にも知られ、日本人特有の河川観をつくり上げていった。

すなわち、清冽な水、山紫水明の景観、移ろいゆく淵瀬などに代表される我が国の川の姿は、多くの文人や画人に表現され、そして、その作品を通じて日本全国に広められることによって、地域固有の川の姿（名所、歌枕など）や川の持つ無常観などの特有の河川観をつくり上げていった。

これほど豊かに、そして多彩に川の芸術を有する国民は、日本人を除いて世界的にそう多くはないと考えられ、川というものが、我々日本人の記憶の奥底にまで入っているということであらわしているものと考えられる。

また、地域固有の川の個性は、地域と川との関わりの中で、さまざまな民俗を育んできていった。



例えば、洪水の常襲する地域では、川の怒りを収めるための祭りや洪水に関わるさまざまな言い伝えが多く残されている。一方、湯水の恐れのある地域では、川や水の恵みへの感謝をささげるための祭りや雨乞いなどの行事が多く残されている。

このようなことから、一つの川・流域の歴史や風土を表す俳句・和歌などの文学や絵画などの芸術や川や水に関わる民俗を空間的・時間的に系統立てて収集・整理することにより、川から見た歴史・風土、すなわち、その川が持っていた個性・役割・特徴を浮かび上がらせることが可能となる。

## (二) 代表的な文学等に見る河川の姿

ここでは、懇談会での話題提供・議論をもとに、和歌、俳句、歌枕、今様、民俗や伝承、祭りや信仰、絵画、映画、近代文学に表現されてきた川の姿について、報告する。

### (イ) 和歌、俳句にみる川の姿

清らかで変化に富む川の流れ、川で生活を営む人々の姿、千鳥や氷魚に代表される川の自然など、四季折々の川の風景は、古来、多くの文人に愛され、和歌や俳句に表現されてきた。

和歌は、古代から現在に至るまで多くの歌人によって詠まれており、多くの川が、表現されてきた。

例えば、我が国最古の歌集である万葉集には、飛鳥川を次のように詠んでいる。

明日香川しがらみ渡し塞<sup>せ</sup>かませば流るる水ものどにかあらまし

年月もいまだ経なくに明日香川瀬瀬ゆ渡しし石橋もなし

ここから、飛鳥川が非常な急流であり、石橋も頻繁に流されてしまっていた様を想像するに難くない。このような川の激しい流れ、移りゆく湍や瀬の姿は、月日の流れの早さの比喻として使われることも多かったが、やがて、『方丈記』の冒頭に見られるような、人の世の移ろいやすさ、無常観へとつながり、緩やかな流れの大陸では育たなかった、日本人独特の河川観が形成されていくのである。

また、近代を代表する歌人の一人である齋藤茂吉は、最上川に関する多くの和歌を残しており、最上川が、彼にとってかけがいのない川であったことが読み取れる。

わが病やうやく癒えて歩みこし最上の川の夕浪のおと

ながらへてあれば涙のいづるまで最上の川の春ををしまむ

敗戦の前後、病気となり、故郷へ疎開した茂吉は、最上川によって心を癒され、励まされて、

最上川を主題とする歌を詠み続けたのである。つまり、最上川は、茂吉にとって物理的な存在を越え、傷心の彼をその懐に抱き、一段と大きく育んだ「母なる川」であったのであろう。

また、和歌に詠み込まれる歌詞(うたことば)や歌を詠んだ場所そのものを指すものとして、歌枕がある。歌枕は、古代から人の行き来した地域や、著名な歌人や歌を詠むような貴族たちが通った地域について多く残っており、平安時代に京都にいた知識人たちの頭の中にあつた日本列島の地域ごとに生まれたさまざまな歌が、網羅・分類されて残されている。

すなわち、歌枕は、和歌に詠われた地形を分類し、その地形が存在する地名を特定するとともに、その地名を詠み込んだ歌を集めた、日本の国土の索引、一種の文化のインデックスとなっており、現代の日本で失われた地名や当時の日本人々の心に浮かんだ風景の索引ともいえるべきものである。日本の主な川は、平安朝のころに歌枕によって整理されており、『万葉集』以来の日本の勅撰歌集の中に出てきたような歌、そこに詠み込まれた地名、川の名前が網羅されて、川の名前から歌が引けるようになっていいる。このことは、歌枕となった川が、当時の人々にとって、重要な、あるいは、かわりの深い川であったことを示すものであり、今日で言う「一級河川」に相当する存在であったと考えることができよう。

なお、平安の後期ぐらいになると歌学びの本ができ、歌枕がリストアップされ、平安から室

町にかけては京の都人が実際には出掛けもせず歌に詠み込むという使い方がされていたため、単なる歌枕としての川と、人間が実際に生活している現実の川の姿との違いには留意する必要がある。

俳句に着目して川の姿を求めると、芭蕉と蕪村という二大俳人に出会う。彼らは伊賀上野と毛馬という生まれた場所こそ違うが、奇しくも同じ淀川水系の水を飲んで育っており、川にまつわる不思議な縁を感じさせる。彼らは、先の齋藤茂吉にとっての最上川ほど強烈ではないものの、その俳句の中で自らが生まれ育った身近な川を母なるものと見て、そこに還っていく自分をイメージしており、川が彼らの作品の中でいかに重要であったかを想像することができる。例えば、伊賀上野の木津川支川の服部川という小さな川の近くで生まれた、芭蕉の末期（時世の句の後に詠んだといわれる）の句では、

清滝や波に散り込む青松葉

と詠んでおり、自分を青い松葉に重ね合わせ、清滝川に散り込んでいく、すなわち、母なる川に還っていく様を造形しているといえる。

また、淀川下流の毛馬で生まれた蕪村は、淀川やその近くの風景を多くの句で読み込んでおり、

花いばら故郷の道に似たるかな

うれひつつ丘にのぼれば花いばら

などと、「花いばら」と母の面影を重ね合わせ、そして、故郷毛馬の川沿いの道を思いやっているのである。

また、俳句や和歌をひも解くと、『奥の細道』に代表されるように一種の詩的地誌とも言えるくらいの現地の地形に関する把握力を持っているものがある。例えば、松尾芭蕉が奥の細道で詠んだ、

五月雨をあつめて早し最上川

の「あつめて」という言葉の中には、最上川の背景にある山々に五月雨が降り注ぎ、それが滝になり、谷川になり、支流になって、最上川に合流することを見事にとらえ、舟に乗ってみたときの川の流れの実感として表現している。

また、古代の歌人である柿本人麻呂も

穴師川川波立ちぬ巻向の弓月が岳に雲ゑ立てるらし

と『穴師川の川波が高いから、巻向山にきつと嵐が来ているのだろう』という歌を詠んでおり、古代からの俳人なり歌人が、地理的な観念を持ち、地域の川の特性を踏まえて周囲の山や川を

詠っているという、世界的にも希少な特性をもち、すでに流域単位概念を持ち合わせていたことが伺える。

### (口) 今様にみる川の姿

今様は、平安時代から鎌倉初期ぐらいまで下って三百年ほどの間に広く流行した歌謡或いは民衆歌謡というもので、現代でいえば歌謡曲に相当する。

この今様には、人と川との関わり合いを謡ったものが、替え歌も含めて非常に多くあり、そこから当時の川が、人々の暮らしにいかに関わっていたかをうかがうことができる。また、今様は淀川と関わりが深く、多くの今様が淀川とその水系で謡われている。これは、淀川が大阪湾あるいは瀬戸内海と都を結ぶ交通の要所であり、多くの人が行き来し、そして、それら旅人を接待する遊女たちが、今様を謡っていたことに起因するものである。

例えば、後白河法皇が編集した『梁塵秘抄』をひも解くと、

淀河の底の深きに鮎の子の 鶉といふ鳥に背中食はれてきりきりめく いとをしや

鶉飼はいとほしや 万劫年経る龜殺し 鶉の首結び 現世はかくてありてもありぬべし

後生我が身をいかにせん

のように、鮎や鶉飼の姿と遊女である自分の境涯を重ね合わせ、嘆く若い女性の姿を見出せる。また、

八幡へ参らんと思へども 賀茂川桂川いとはやし あなはやしな 淀の渡に船うけて  
迎へ給へ大菩薩

思ふ事なる川上に迹垂れて 貴船は人を渡すなりけり

のように、現世のしがらみ、彼岸と此岸を分ける境として、川を謡いこみ、浄土にわたる救いを求めるものや、

いづれか法輪にまいる道 うちの通りの西の京 それ過ぎてや 常盤林のあなたなる  
愛敬流れくる大堰川

嵯峨野の興宴は 鶉舟筏師流紅葉 山陰響かす箏の琴 浄土の遊びに異ならず

のように、当時の川の姿や風俗を謡いこんだものなど、様々な今様が納められており、その風景の中に当時のどんな日本人がどんなことを考えていたのかを伺い知ることができる。

また、今様には、神（若宮）にささげる謡という特徴もあり、巫女が今様をささげると、神（若宮）も巫女の口を通して今様を返すということになっているのである。  
このような信仰と川のかかわりの姿は、

大将立つといふ河原には 大將軍こそ降り給へ あづちひめぐり諸共に  
降り遊び給へ大將軍

に見られるように、「天から降りてくる神は、河原に降り立ち、そして河原で遊ぶ」と信じられており、故に河原がその近くに神社（若宮）を建立し、河原と疫病を鎮めてもらおうということになるのである。

このように、中世の社会において、川とその周辺は、交通の要所としてだけでなく、遊興の場、信仰の場として、非常に重要な役割を果たしており、このような川の姿、人と川との関りは、当時の流行歌であった今様に、特に強調されて見出せる。

### （八）民俗にみる川の姿）「川の民」の記憶

少し前の日本には、川を生活の場とする「川の民」が各地にいた。

井上鋭夫の「山の民・川の民」によると、彼らは、かつては法印と呼ばれる山伏たちに従って、実際に金掘などの仕事をしていた「山の民」であり、近世になって、法印たちが金掘などから撤退すると、彼ら「山の民」も山を降り、川沿いに定住の地を求めて、そして「川の民」となり、交易や物資の輸送、塩木流し、筏流しなどといった生業についていったものと考察さ



れている。

このような、川の民の姿は、現在ではほとんど消えつつあるが、かろうじて「聞き書き」などの手法により、その姿を見出すことができる。

最上川において、彼ら川の民の暮らしを追いかけると、今はほとんど消えてしまった「渡し場」「渡し舟」に出会うことができる。それらは、点在する集落をその対岸と結ぶという機能だけでなく、風景としても美しく観光名所や写真に取り上げられることが多い。しかし、これら渡し場には、その牧歌的な風情だけでなく、多くの場合、悲惨な記憶も絡まりついていることを忘れてはならない。

また、最上川流域では、渡し舟の船頭を「タイシ（太子）」と呼ぶことが多いが、これは、この地域の川の民たちが、太子信仰を携えて、物資の輸送であるとか、交易、川漁などを生業とする人々が点々と存在していた、そんなかすかな痕跡を残しているのではないかと想像することができる。



撮影 新関昭男

一方、地方に残されている民話や伝承の中にも、川の民の姿を見出すことができる。

例えば、最上川流域に残されている『サケの大助』という有名な伝承では、サケが遡上するときにはサケの声（伝承では「サケの大助、今上る」という）を宴会などをして聞かないようにするという伝承がある。これは、遡上し、産卵するサケに対し、遡上時に漁をしてはならないという水産資源を保護する教えを与えるものであり、ここにも川の民の姿が垣間見えよう。

## （二）祭りや信仰にみる川の姿

「今様にみる川の姿」で述べたように、既に中世の日本において、川や河原は神々が降り立ち、遊ぶところと考えられていた。また、遡つて、神話についてみても、例えば、天照大神が岩戸にこもって、困った神々が相談する場所は、「天安河原」と呼ばれる河原である。

このように、川や河原は古代から、神々が集まる神聖な場所として、日本人の信仰の対象となってきたと考えられ、これ故に、川沿いに多くの神社（若宮）が建立されたのであろう。

京都を代表する賀茂川についてみると、一番下流が稲荷社、祇園社、それから下賀茂社、上賀茂社の両社、さらに上つて、貴船社（賀茂社の若宮と言われる）というように、賀茂川沿いに多くの神社が建立されていたことがわかる。なお、京都は元々賀茂川の西側が中心地であつ

たが、やがて、賀茂川の治水がすっかりなされてくると、東側に新しい場が形成され、洛中を此岸、それに対し、賀茂川の東側を彼岸とするようなとらえ方もされるようになった。

なお、川に関わりの深い京都の祭りは多くあるが、上述の賀茂川の最上流にある貴船社は、川をつかさどる龍神を祀る社でもあり、「止雨の祈り」や「祈雨の祈り」が良く行われている。また、京都の夏の風物詩でもある祇園社の祭り（祇園祭）においても、元々は賀茂川にわざわざ舟橋をかけ、彼岸側の祇園から此岸の洛中へと、賀茂川の瀬を神輿が渡って、そして、再び帰っていくのである。

また、淀川についても、下流の天神祭りはもちろんのこと、宇治の平等院、石山寺、比叡山の鎮守である日吉社があり、琵琶湖を浄土の海として捉えられていたようである。

一方、和歌山県南部の古座川においては、「河内様（こうつたま）」と呼ばれる神を祀る変わった祭りがある。この祭りでは、漁船が川を遡り、川の中央にある花崗岩の小島「河内様」を夜中に三回廻り、神を迎えるといったものである。なお、河内様という神様については、河童などの諸説があり不明であるが、いずれに



写真提供 高橋六二委員

せよ、古座川と言う川に祀られている水の神様なのである。

また、この古座川の河口の海上には、九龍島（くろしま）と呼ばれる島が、河内様と併せて地域の信仰を集めており、河内様の祭りの時には、この海の神と川の神の双方が祭られることとなっている。

さらに、伝統的ではないものの、河川事業が一つの祭りを生み出すこともある。

例えば京都府北部を流れる由良川では、昭和初期の北丹後地震での災害復旧により、鋼矢板を用いた強固な堤防が築かれ、当時の災害査定官の名前を取って岩沢堤と名付けるとともに、毎年八月には堤防祭りが行われている。

また、北海道の夕張川においても、治水事業に貢献した技術者を祭り、治水感謝祭という祭りが続けられている。

これら両事例は、その地域が苦勞して川と付き合い、時として、川と戦ってきた歴史を物語るものであり、地域の人々の河川事業に対する思いが感じられる。

このように地域や川によってさまざまな形の信仰や祭りが残されており、地域の特徴やその地域の人々の川への思い、そして川との関わりの姿を見出すことができる。

### (水) 絵画にみる川の姿

川の姿を描いた絵画は、古くより多くあるが、江戸期以前は様式化されることが多く、当時の川の姿が具体的に表現されるのは江戸時代以降と考えられる。

この江戸期以降の絵画で川は、遠近法を意識したパノラマ的な表現、あるいは、上流から下流、または、河口から上流へ遡上する連続画面形式の絵画として描かれていた。

パノラマ的な絵画については、十八世紀末に西洋から遠近法が入ってくる以前に日本独自の遠近法で描かれていた浮絵や覗き眼鏡を覗いて風景を見る眼鏡絵がある。

例えば、司馬江漢の『三囲景図』は、日本最初の銅版画として製作された眼鏡絵であり、三囲神社付近の風景と隅田川が描かれている。

一方、連続画面形式のものとしては、『隅田川兩岸一覽図巻』と呼ばれる絵巻物形式の江戸名所絵などが一七八一年(天明元年)に描かれている。



司馬江漢「三囲景図」(写真提供:神戸市立博物館)

また、十八世紀末から十九世紀にかけては、同じように連続画面形式で「真景図」と呼ばれるものが、画人たちに描かれるようになる。

例えば、紀州熊野本宮から新宮までの熊野川沿いの風景を描いた『熊野舟行図巻』（谷文晁）などがこれにあたる。

これら真景図においては、現在、使用されている地図のような正確さ、いわゆる工学的、数理的な正確さはないが、一つの川の流れに沿って見える景観を、実際上どう見えるかということを超えて、あたかも旅をするかのごとく、恐らく、画家が美しいと思ったものや場所をことごとく取り込んで、一幅の絵の中に表現しようとしたものと考えられる。

このように、川を描いた絵画の場合、川を遡上、あるいは、下降するといふ「旅」を表現することによって、空間の移り変わりだけでなく、時間の流れをも表し、一つの物語をかもし出す役割をなしていると考えられる。この要因としては、例えば、陶淵明の『桃源郷』のような古来からの物語、叙述も何らかの影響を与えている可能性がある。すなわち、何か理想的な場所を求めるといふ物語の中において、川が果たしていた役割の大きさが、日本人



谷文晁「熊野舟行図巻」(写真提供：山形美術館)

の心の深い部分に残り、これが川をモチーフとしたときに何らかの影響を及ぼしたのではないかと推測することができる。

また、川は、生活と密着した場所であるがゆえに様々な絵画に描かれ、その中からその時代の生活や産業などを見てとることができる。例えば、江戸の名所図絵が描かれるにあたってテーマとされる場所は、意識的に選ばなくても何らかの形で水に関係した場所になるほどに、江戸の町は水辺、川と重要な関係にあった。

このように、江戸が水辺をもって絵画に描かれた幾つかの要因には、物資の輸送がほとんど水路を使って行われていたこと、そして、水陸交通の結節点とも言うべき場所、例えば江戸橋の広小路、両国広小路といった産業活動上重要な拠点であった場所の周辺には、それと同時にいわゆる盛り場が形成されていたこと、芝居小屋など人々を自然的に多く集める遊興の場所も水路を使って人々を大量に運ぶような構造になっていたことなどが挙げられる。



歌川広重「江戸名所三つの眺 両国夏の月」  
(写真提供：北九州市立美術館)

このことは、浮世絵に影響を及ぼされたヨーロッパの絵画にも見られ、特に、浮世絵調に絵を描こうとしてこだわったのは川の存在であったようである。

### （へ） 映画にみる川の姿

これまで述べてきたように、川は日本人の心の深い部分の一要素をなしていると考えられるが、このことは、歴史的な文学や絵画などにとどまらず、近代に作成された映画にも色濃く出ていることがある。

例えば、東京の低地を流れる荒川（放水路）についてみると、（隅田川の名前に比べて）歴史の浅い川ではあるものの、実に多くの映画に取り上げられている。

昭和十三年に作られた山本嘉次郎監督の『綴方教室』では、高峰秀子演じる主人公の少女が、貧しいながらも、荒川の土手で子供たちと遊んだり、ウサギの餌となる草を土手に取りに来た



アンリ・リヴィエール「エッフェル塔三十六景」  
（写真提供：ニューオータニ美術館）



りするシーンが描かれている。これらシーンは、全体に暗くなりがちで貧しい家庭で育った少女の情景を明るくおおらかに映し出すのに効果的に使われている。

同様に、昭和二十三年の小津安二郎監督の『風の中の牝鷄』でも、小津映画としては非常に暗い物語となっているが、この中で唯一、主人公を演じる田中絹代が小さい男の子を連れて荒川にピクニックに出かけるという、川を舞台とした明るいシーンが挿入されているのである。

このように荒川が東京に住む人々にとって、身近な娯楽の場であったことは、昭和二十八年に作られた小津安二郎監督の『東京物語』にも描かれている。この映画では、東山千栄子演じる、尾道から東京に出てきた老婆が、長男の息子（老婆にとっての孫）と二人で、荒川の土手で遊ぶシーンがあり、ここでの印象的な台詞と併せて、この映画の名場面の一つとなっている。

また、永井荷風の短編を原作として、昭和三十年に作られた久松静児監督の『渡り鳥いつ帰る』では、東京大空襲の戦火を逃れて荒川の土手に避難してきた中年の男女が、終戦後、再び荒川の土手で偶然出会い、恋が生れるといった物語であり、能での川での取扱いと同様、「出合いの場所」として川が取り上げられ、昭和三十年頃の荒川の風景とともに描かれている。

このように、荒川だけについてみても多くの映画の中で表現されており、そこには、川を憩いの場として生きる人々の姿を垣間見ることができる。

また、最近話題の宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』においては、具体的な川ではないものの、物語の全体に川をテーマとして取り上げている。例えば、汚された川が湯屋で綺麗になる、あるいは、埋められて失われた川の化身である龍が準主役として出てくるなど、川と人とのつながりをテーマとして映画に表現しているように考えられる。

このように、川は、多くの映画監督たちによって、さまざまな映画の中で描かれてきており、当時の風景を残す貴重な映像資料として、また、風景としての川の美しさを発見するものとして、重要な機能を果たしている。

### (ト) 近代文学にみる川の姿

近代文学にも川をモチーフや舞台として書かれた作品が数多くある。

例えば、永井荷風が隅田川を舞台とした『すみだ川』、多摩川を舞台とした室生犀星の『あにいもうと』、利根川を題材とした田山花袋の『田舎教師』、千曲川の風景をつづった島崎藤村の『千曲川のスケッチ』、北上川での思い出をつづった宮沢賢治の『イギリス海岸』、藤沢周平の『蝉しぐれ』や芥川龍之介の『大川の水』『本所両国』等も川を描いた近代文学と言えるだろう。

では、近代文学の作家たちは、いかに川を捉え、表現してきたのであろうか。例えば、『すみだ川』を著した永井荷風は、『断腸亭日乗』によると、昭和七年から昭和八年にかけて、頻繁に隅田川沿いを歩いているのだが、沿川の市街化が進むと嫌になって、今度は、さらに東の荒川（荒川放水路）まで足を伸ばすこととなる。そこで彼は、荒川のその荒涼たる、茫漠たる風景（この当時荒川下流域は放水路完成後十五年程度しか経ていない）に癒され、三日に一回くらいの頻度で荒川を訪れ、『溼東綺譚』という名作を生み出すこととなる。

このように、川と文学の関わりをみた場合、例えば、国木田独歩が見向きもなかった武蔵野の雑木林を見て美しさを見出したように、それぞれの文人たちが、その川の風景の美しさ

（万人がみて美しいと感じる物ではないのかもしれないが）を発見することが重要であり、また、併せて人と川との強いつながり、係わり合いの姿が見出されることが必要なであろう。

### 三 歴史・風土に根ざした川を目指して

### 三 歴史・風土に根ざした川を目指して

#### (一) 今求められていること

##### 地域の特性に合った川の魅力を引き出し、個性ある地域づくりに寄与する

平成九年の河川法改正により、河川行政の目的は治水、利水に加え、環境へと広がり、生態系保全や河川利用に向けた整備が一段と重要になった。しかし、未だ川を上流から下流に至る流域全体として捉える視点が不十分であり、生態系、景観等を包括し、歴史・風土という地域や人とのつながりを含めた包括的な河川環境の整備に取り組むことが重要である。また、同時に、今後の河川の整備においては、個性ある地域づくりに寄与することが求められており、地域の特性に合った川の魅力を引き出すことが重要となっている。すなわち、川と地域の歴史・風土を十分に理解し、川の個性、地域の特性に合った河川整備を計画・実施することが求められているのである。

一般に、日常から川と接することの多い地域住民は、土地勘や特定の場所に関する現況や変遷などの豊富な知識および地域固有の自然、歴史、風土等に関する豊富な知識を有していることが多く、また、市民団体は活動地域の細やかなニーズを把握することができるほか、その活

動に地域の他の人々も参加しやすいという柔軟性を有している。一方、河川管理者は、河川整備の計画手法や工学的判断などについては精通しているものの、地域固有の歴史・風土に関する知識は限られており、全国で同様な河川整備を実施してしまうことが多い。

すなわち、地域の特性を十分に理解し、川の個性に応じた河川整備を計画・実施するためには、川と日常から接している地域住民、NPO、市民団体等と連携して、地域の歴史・風土と川とのかかわりに関する情報を共有し、これを計画に反映することが肝要である。

したがって、今後の河川整備においては、地域住民と接する機会を積極的にもうけていくことはもちろんのこと、地域と川の歴史や風土について十分に調査を行い、この情報を地域住民と共有するとともに、協働を強化・推進していくことが、川の魅力を引き出し、個性ある地域づくりや川づくりを推進するために不可欠である。

## (二) 歴史・風土に根ざした川づくりのための「よすが」

ここでは、本懇談会での議論をもとに、川づくりにあたっての基本となる考え方、調査段階、計画段階における「よすが」について整理する。

### 【基本的考え方】

川は、我々日本人にとって記憶の奥底にまで入っている要素である。このため、川にまつわる歴史・風土は、いかなる河川においても残されており、そして、それは、地域の特色や時代的、社会的背景、各河川の個性を踏まえてはぐくまれており、それぞれの川で固有のものといえる。

したがって、河川管理者は、工学的、生態学的な知見に加え、それぞれの川の歴史・風土を十分に調査・把握し、画一的でない、個性ある河川整備に取り組んでいくことが肝要である。

### 【調査段階における「よすが」】

・ 和歌・祭りについては、本懇談会を受け、既往文献などをもとに全国的な整理を実施している。これらは、あくまでも初期の情報を提供するものであり、各河川においては、自治体史などを利用した地元での調査結果から明らかとなった情報を補完する必要がある。

（和歌・俳句、祭りの全国分布参照）

・ 川の歴史・風土は、その地域の社会的環境の変化によって推移していると考えられる。このため、空間的な整理に留まらず、時間的な整理も行い、歴史・風土が形成された背景に



ついて十分理解しておくことが必要である。なお、和歌については、詠まれた時代と歌集に収録された時代に差のある場合もあり、注意が必要である（和歌にみる最上川の変遷参照）

・調査にあたっては、既往文献調査や有識者からの指導はもちろんのこと、地元に着した人々（地域の古老など）からの「聞き書き」も有効な手段である。

・和歌・俳句や歌枕、今様、絵画などについては、舟運や交通などともかわりが深い。このため、歴史的な街道や宿場、河岸や船着場などについても整理しておくことが理解を助ける。

・歌枕は、日本の国土の索引、インデックスとして有効であり、これを手がかりに地域の歴史・風土を調査することも可能である。ただし、歌枕は、当時の政治体制との関わりも大きく、ほとんど歌枕の存在しない地域もある。

・祭りや年中行事、信仰については、地域と川との関わりを示すものであり、例えば、長年洪水に悩まされてきた地域には、荒れる川を宥めるための祭りが残されているであろうし、湯水の地域には、雨を乞う祭りや水の恵みに感謝する祭りが多く残されている可能性が強い。ただし、かつての川は、氾濫原の中をある程度自由に移動しており、現在の河道のみ

からでは理解しきれないことも多い。

### 【計画段階における「よすが」】

- ・川だけを美しくしても何ら意味を持たない。道路やあるいはまちづくりと一体となって、地域の歴史・風土に根ざした川づくりを進めることが重要であり、このためには、関係機関や地元住民、市民団体などとの連携が不可欠である。
- ・歴史・風土に配慮した川の整備計画を策定するには、その川の流域における地位、地域における地位、日本における地位、世界における地位について、スケールを変えて十分理解し、これを念頭に計画を策定する必要がある。
- ・このためには、その川の役割を十分に知っているさまざまな分野の有識者の意見を良く聞き、計画に活かすことが必要であり、十分な意見聴取と計画策定期間が必要である。

### (三) 歴史・風土に根ざした川を目指して

地域の歴史・風土に根ざした川を実現するためには、まず、「よすが」を手がかりに、流域単位で川の歴史、風土や文学、文化などを十分調査研究し、空間的、時系列的に整理すること

が必要である。このためには、様々な分野の知見を集めた共同研究として取り組んでいくことが必要であり、また、将来的に他分野の研究成果にもとづく加筆が可能なものとする必要がある。

なお、このように川に関わる様々な歴史・風土が育まれているのは、我が国固有の特性と考えられ、我が国の文化を諸外国に理解してもらうのに格好の材料と考えられる。また、このように、歴史・文化の視点から川や流域、人と川の関わりを考察することは、世界で発生している水問題を捉える一つの視点とも考えられるため、複数言語での資料の作成を心がけ、世界に向けて発信することも望まれる。

近畿地方拡大図

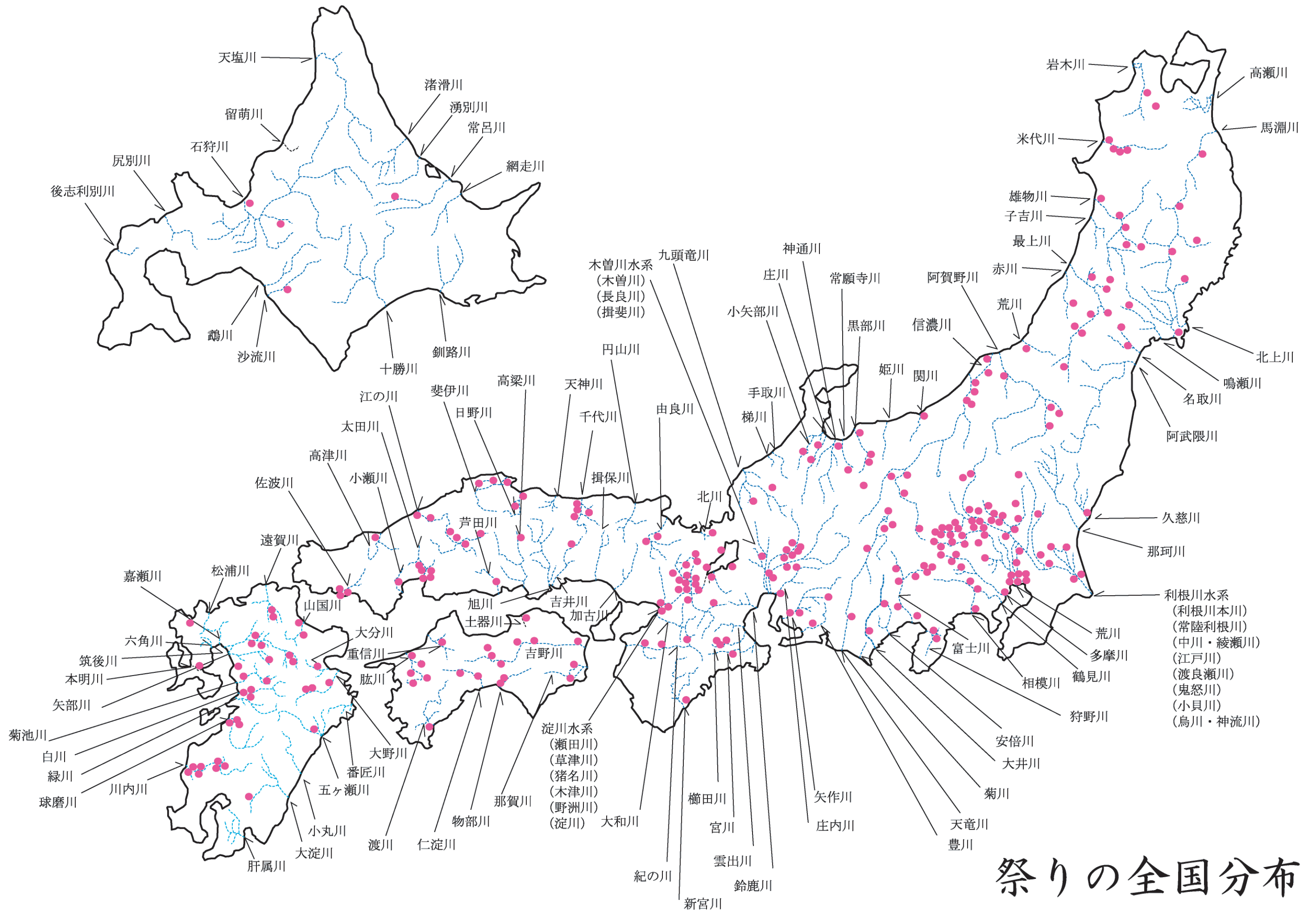
This map illustrates the geographical distribution of waka and haikai across the Kansai region, centered around the Tone River basin. Each river system is labeled with its name and a list of associated literary references, often including the names of the authors (e.g., 源実朝, 藤原家隆, 斎藤冬實). The map is divided into several major river basins:

- 淀川水系 (Tone River Basin):** Includes references to various waka such as "淀川水「打田流」", "淀川水「瀬田橋」", and "淀川水「宇治川」".
- 大和川水系 (Yamato River Basin):** Includes "大和川水「大井川」" and "大和川水「初瀬川」".
- 相模川水系 (Sagami River Basin):** Includes "相模川水「相模川」" and "相模川水「伊豆川」".
- 近江川水系 (Omi River Basin):** Includes "近江川水「近江川」" and "近江川水「河内川」".

The callouts are densely packed, particularly in the central and eastern parts of the region, showing a high concentration of literary references to specific river locations.

和歌・俳句の全国分布

(現在一般に伝えられている和歌・俳句の全国分布を調べてみた)



祭りの全国分布

# 和歌にみる最上川の変遷

歌集・句集	大和時代		奈良時代	平安時代				鎌倉時代	室町時代		安土桃山	江戸時代		近・現代	
	大和朝廷	飛鳥京 藤原京	平城京	平安京				鎌倉幕府	室町幕府			江戸幕府	東京		
最上川の歌・句	万葉集（白鳳~天平）		古今和歌集	後撰和歌集	拾遺和歌集	後拾遺和歌集	金葉和歌集 詞花和歌集 千載和歌集 新古今和歌集	新古今和歌集 新古今和歌集 新古今和歌集 新古今和歌集 新古今和歌集 新古今和歌集	新古今和歌集 新古今和歌集 新古今和歌集 新古今和歌集 新古今和歌集 新古今和歌集	新古今和歌集		あくのほそ道 武玉川 柳多留拾遺(後集) おらが春 赤字は勅撰和歌集	赤字は勅撰和歌集		
	最上川のぼれはわたるいな舟のいなはなればなり(古今)		最上川 深きに舟あすいな舟の心かろくも返るなかな藤原定方	いとしく頼まるかな最上川しほはかりのいなとみれば藤原相如	最上川 船手ひくらんいな舟のしほはかりのいなとみれば西行	最上川 船手ひくらんいな舟のしほはかりのいなとみれば西行	最上川 船手ひくらんいな舟のしほはかりのいなとみれば西行	最上川 船手ひくらんいな舟のしほはかりのいなとみれば西行	最上川 船手ひくらんいな舟のしほはかりのいなとみれば西行	最上川 船手ひくらんいな舟のしほはかりのいなとみれば西行	最上川 船手ひくらんいな舟のしほはかりのいなとみれば西行		最上川 船手ひくらんいな舟のしほはかりのいなとみれば西行	最上川 船手ひくらんいな舟のしほはかりのいなとみれば西行	最上川 船手ひくらんいな舟のしほはかりのいなとみれば西行

「稲舟」を「否(いな)」と掛けて用いたり、そのものを詠いこんでいる

急流(早さや濁り)・舟運・雄大な景観を詠み込んでいる

**本合海地区の位置と最上川うたのみち**

**かつての船着場 昭和8年頃**

**復元された船着場**

齋藤茂吉歌碑  
最上川 いまど濁りて ながれたり  
本合海に 舟帆をあげつ

金子兜太、皆子夫妻句碑  
郭公の 声降りやまぬ 地藏渦  
ひららの 網かぶりたり 八向橋

**最上川うたのみち**

芭蕉像

芭蕉句碑  
五月雨を あつめて早し  
最上川

和歌や俳句については、詠まれた時代と歌集・句集に収録された時代に差のある場合があり、本年表では和歌や俳句が詠まれた時代に目して整理した

## 資料

歴史・風土に根ざした郷土の川懇談会 日本文学に見る河川 委員名簿

委員長 京都造形芸術大学学長

芳賀 徹

委員 東北芸術工科大学教授

赤坂 憲雄

学習院女子大学助教授

今橋 理子

第三回世界水フォーラム事務局長

尾田 栄章

評論家・翻訳家

川本 三郎

白百合女子大学教授

久保田 淳

東京大学大学院教授

五味 文彦  
ごみ ぶんげん

国際日本文化研究センター教授

千田 稔  
せんだ みのる

跡見学園女子大学短期大学部教授

高橋 六二  
たかはし ろくじ

佛教大学教授

坪内 稔典  
つぼうち としのり

京都大学大学院教授

樋口 忠彦  
ひぐち ただひこ

国際日本文化研究センター助教

光田 和伸  
みつた かすのぶ

関東学院大学教授

宮村 忠  
みやむら ただし

(五十音順、敬称略)